

# ビジネス Today

## 変身図る運送会社

### いまや「物流業」

「宅配便や引越センターの急成長に続け」と、運送会社の新事業開拓熱が盛んだ。酒を飲んで運転できなくなった人の車を、トラックで自宅へ送り届ける「飲酒運転防止便」。トラックと運転手の管理に頭を痛めている問屋にかわって、小売店への配送ばかりかセールスまで引き受ける「配送・販売代行業」。積み荷が外から見えるガラス張りの荷台をつくり、走るショーウィンドーへの用途を模索中の業者もある。「もう運送業だけのトラック業者だといわないで。われわれは物流業」と気鋭の経営者たちは胸を張る。

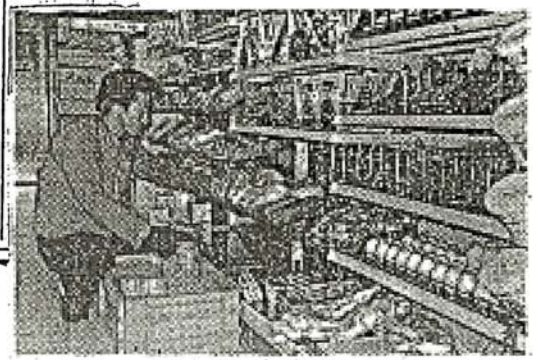
問屋の配送・販売業務を代行するのは関西急送（本社・京都市、資本金一億六千万円、柴山允社長）。近畿を営業圏とする小口貨物の混載輸送だけでは生き残りが難しくなり、数年前から始めた。客は十社近くあり、仕事の範囲も少しずつ違いますが、代表的な



発行所 大阪市北区中之島3丁目2番4号(郵便番号530)  
朝日新聞大阪本社  
電話 (06) 231-0131  
郵便振替口座 大阪5-550番  
©朝日新聞大阪本社 1984

## 問屋の配送代行 注文も引き受け

のは昨秋スタートした食品問屋山屋（大阪市）とのケースだ。



問屋にかわって商品を小売店へ配送。陳列からちょっとした営業までこなす関西急送の社員＝大阪市鶴見区のコンビニエンスストアで

関西急送の十五台の軽トラックが、山屋の配送センターから小売店へ和菓子などの食品を配送する。小売店へ着くと、自分で値段シールをはり、棚に並べる。在庫を見て翌日の注文をもらい、「この店では、この商品が売れますよ」と営業活動の一端もこなす。一日の売れ行きはカードに記録、山屋はそれを電算機管理で把握し、本来の営業活動に専念する仕掛けた。

関西急送の柴山社長は、前経営者が投げ出したあとを引き受けて再建につとめた異色の個人経営者だ。問屋の配送・販売代行業には今春採用した高卒、大卒社員十四人全員を投入する勢いで「流通、運送業者の垣根がこれからはどんどんなくなる」といっている。

倉庫業の大倉（本社・大阪、資本金四百万円、木村文俊社長）は、昨秋「流通サービス研究会」を発足させた。「業種開拓を模索する物流業者」を会員に、新しい行き方のコンサルタントをするのが目的。目下、倉庫六十社で、二月に一度セミナーを開いたり、業界ニュースの集刊版を月一回、郵送する。

具体的な社内合理化策、新分野開拓のための調査事業などは個別に顧問契約を結ぶシステムだ。「物流業者は、従来から取引のある客の荷主に依存するだけでなく、マーケティングに踏み出すべき時代」というのが木村社長の主張だ。